

MIS^t 手技における経皮的椎弓根スクリー法 —基礎と臨床応用

監修：日本 MIS^t 研究会

竹下克志

自治医科大学整形外科

本書、『MIS^t 手技における経皮的椎弓根スクリー法』は日本で初めて経皮的椎弓根スクリー (PPS) をターゲットとして記述された良書である。PPS はあまりに急速に発展したあまり、On-the-Job Training は精力的に行われているものの、知識としての教育が十分とはいえない状況にある。本書のように体系的に書かれたテキストは、多くの脊椎外科医が求めていたものである。さらに、脊椎外科医一人ひとりの臨床活動の位置づけと方向性を考える契機にもなるだろう。

脊椎外科での低侵襲化は消化器外科や心臓外科などほかの外科領域と比べて早くはなかった。除圧から始まった脊椎内視鏡手術はラーニングカーブの急峻さが指摘されて、一気に広まったとはいえない経過をたどった。一方、遅れて導入された PPS に代表される最小侵襲脊椎安定術 (MIS^t) では大きな違いがあった。患者の高齢化と併存疾患のために低侵襲への要請が高くなり、MIS^t に最適化された専用器械・インストルメン

トが次々と開発されていった。すなわち、需要と供給両面からの追い風があった。そして、今回執筆しているトップランナーである脊椎外科医の方々の貢献によって MIS^t は急速に広まっていった。

本書では、PPS の意義・歴史・解剖などを扱った総論から始まり、基本的な刺入法、そして胸椎、仙骨、骨盤での刺入法がピットフォールを含めて詳しく示されている。また、骨切りへの応用や PPS とともに急速に広まっている XLIF/OLIF など LLIF との併用について記載されている。本書では、変性疾患にとどまらず外傷や腫瘍への応用が詳しく紹介されている。筆者は外傷や転移性腫瘍こそ PPS の恩恵が最大限発揮できる病態だと思っており、大変興味深く拝読させていただいた。

PPS 固有の合併症に対する対策とトラブルシューティングを大きく扱っている点も素晴らしい。PPS の弱点として乏しい位置情報があるが、支援としてのナビゲーションの活用や代表的支援法である透視における被曝の低減の



工夫などが紹介されている。最後に現行のシステムの紹介と、頸椎への応用、今後の PPS システムへの展望が示されている。これだけ重要な分野となった MIS^t の最先端である本書を読み進むにつれ、PPS のもう一つの弱点といわれる骨癒合の意義を十分議論する時期にきたと筆者は感じている。また、脊柱変形は MIS^t の適応が最も難しい病態であろうが、新しい矯正デバイスの開発と骨癒合促進の新たなストラテジーというブレイクスルーが起こる日は意外と近いのではないだろうか。

本書は 2015 年の時点で PPS について考え得る内容を網羅しており、脊椎外科入門者からすでに PPS を実践しているドクターにも役立つ書籍である。自信をもって推薦する。

●定価 (本体 12,000 円 + 税)
B5 判, 284 頁, 三輪書店